

政党政治と政権パターン

——連合政権の理論と構造(三)——

岡 沢 憲 芙

目次

- 1 権力の司祭者Ⅱ政党
- 2 単独政権のパターン
 - A 単独・独占型政権
 - B 単独・過半数政権
 - C 単独・少数党政権
——以上二一号——
- 3 連合政権のパターン
 - D 最小勝利連合政権
▽西ドイツの連合政権
——以上二二号——
▽フランス(第五共和政)の連合政権
——以上二三号——
 - E 過大規模連合政権
 - F 過小規模連合政権
——以上本号——
- 4 連合の理論と連合交渉

(前項より)

戦後日本は連合政権を四度経験したが、この最小勝利連合政権に該当するのはそのうち一度だけである。一九四六年五月二二日に成立した第一次吉田内閣である。四六年四月一〇日に行われた第二回総選挙(戦後第一回総選挙)で自由党は第一党になったものの、獲得議席数は僅か一四一で三分の一にも達しなかった(当選者数四六四、議席占有率三〇・四%)。終戦直後期の混乱を反映して、政権形成をめぐるさまざまな工作・策謀が展開された後、最終的に、吉田茂に政権が回ってきた時、一松定吉(通信大臣)、斎藤隆夫(国務大臣)など進歩党議員を数名入閣させ、自由、進歩両党を基礎にした保守連合政権の形をとったのである。進歩党の衆議院議席数は九三であったから、与党の議会内議席は合計で二三四となり、議席占有率五〇・四%の典型的な最小勝利二党連合政権となった(詳しくは5「戦後日本の連合政権史」を参照されたい)。

E 過大規模連合政権

この政権は、連合から排除しても議会内過半数を確保する上で別段支障のない政党、つまり、 \wedge 余分な党 \vee を、少なくとも一つ閣内に含んでいる政権である(連合形成地位が、 \vee MWC_1)。 \wedge 余分な党 \vee の数が多ければ多いほど、また、その現有勢力(法案票決力)が大きければ大きいほど、政権連合の規模はそれだけ一層過大になる。

政党政治の世界では、数学的には余分であるとわかっていても、政権形成・運営上どうしてもその余分な党が必要である時がある。野党時代に密接な共闘関係を結んでいたためにパートナーシップを簡単に切断できないこともある。また、中間に接着剤政党を入れて衝撃を緩和しなければ、政党間距離を短縮できず、従って、連合を組めないこ

ともあろう。過大規模連合政権はまさに、そのような政治算術の所産である。

このタイプの政権は、一般に、三〜四党以上の連合であることが多いが、そのため、政権の運用をめぐっていくつかの問題を抱えることになる。

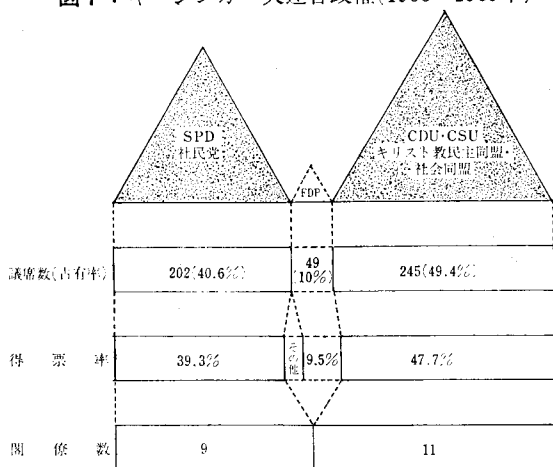
(i) 限りある閣僚ポストを連合パートナー間で公平に配分する作業には困難が伴なう。△余分な党▽を閣外に放逐すれば、閣僚配分率が高まることを知っているのので、政局運営に行き詰まったり、意見が食い違った時などに、いずれ、閣内政党が不満の声を挙げる可能性が大きい。

(ii) 連合パートナー間のイデオロギー距離が(必然的に、そして不必要に)大きくなるので、「原理の腐食」、「思想的・政策的貫性の欠如」を理由に、閣内不統一を演出する政党が生れる可能性がある。とりわけ、イデオロギー指向の強い政党や、政権を担当する迄は遠心的競合を展開していた政党が閣内に含まれている場合はそうである。また、隣接同盟型連合よりも、ブリッジ型連合政権の場合のほうが、閣内不統一に陥る可能性は大きい。

(iii) 議会運営は、あり余る与党勢力を背景にしているため、連合パートナー間の事前協議さえすれば非常に簡単であるが、政権運営は閣内交渉参与者の数が多いため煩瑣になる。△政党間政治▽のみならず△政党内政治▽が閣内交渉に入り込んでくる。連合パートナーの一角が、政党内政治の激化、つまり政権離脱派対政権固執派の対立に直面して、崩れてしまい、過大規模連合が予想されたほどの生命力を発揮できないことがある。

いずれにせよ、このタイプの政権は「政党政治の寡占化」を現出させるので、今日の議会政治の規範からすればのぞましいとはいえない。過大規模連合政権が長期化すれば、選挙は大政翼賛型選挙に変質し、市民の少数意見は封殺される。野党は無力化し、有効な威嚇力を失ってしまう。真の対抗権力が消滅してしまうため、政党政治の活性は

図1：キーンガー大連合政権(1966～1969年)



低下する。議会は政府のいうがままに法案を通過させるだけの無力な承認機関になってしまい、議会政治の精神は死滅してしまう。政党間競合の場合が議会から内閣に移転してしまうからである。

このタイプの政権を経験した国としては、オーストリア、フィンランド、フランス、西ドイツ、イギリス、アイスランド、イタリア、ルクセンブルグ、オランダ、日本などをあげることができる。

過大規模連合政権は、それが生れる時間的背景とその政権に期待されている性格から、二つのカテゴリーに分類できる。

⑧ P ⑧ ^ 平時・大連合政権 V

これは、純粹に政党戦略上の必要から、議会政治の行き詰まりを克服するために、あるいは緊急の政治課題を解決するために、平時に組織される過大規模連合政権である。

戦後の典型的な事例は西ドイツにある。一九六六年から六九年まで政権を担当したキーンガー内閣がそれである。この内閣は、キリスト教民主同盟(一九六議席)、キリスト教社会同盟(四九議席)、社民党(二〇二議席)を与党とする大連合政権で、閣内与党の議席占有率は実に九〇・一%であった。議席数わずか四九議席の自由民主党を野党にして、巨大政党が政党政治を寡占したのである。(詳しくは西ドイツの連合政権の項を参照されたい)。

戦後日本も三度、このタイプの過大規模連合政権を経験した。一九四七年五月二四日に成立した片山内閣、四八年三月一〇日に成立した芦田内閣、および、四九年二月一六日に成立した第三次吉田内閣である。片山内閣と芦田内閣は、社会党（一四三議席）、民主党（一二一議席）、国民協同党（二九議席）を与党とする三党連合政権であったがその議席占有率は六二・九％（二九三議席）で典型的な過大規模連合政権であった。算術的には国民協同党を排除しても過半数を制することができたが、もともと第二党である自由党（一三一議席）をも含む四党連合政権を樹立しようとする過程で生れた内閣であるために、国民協同党の排除は政治的に考えられないことであった。革新ブームにのって第一党に躍進した社会党と保守第二党である民主党の連合など、もし国民協同党という接着剤がなければ、考えられなかったであろう。詳しくは後述するとして、この過大規模三党連合政権は連合諸党間のイデオロギー距離の大きなゆえに、また、閣僚ポストの不公平な配分のゆえに（連合パートナーである社会党の左派を冷遇した）、政局運営に何度も行き詰まった。

いま一つの過大規模連合政権の例である第三次吉田内閣は、民自党と民主党連立派（犬養派）が結びついて成立した。いわゆる「なれあい解散」で民自党は解散時の一五二議席から実に一一二議席増やし二六四議席も獲得した。戦後はじめて、単独で過半数議席を制した政党が出現したのである。民自党としては、当然のことながら単独政権を目指したのであるが、総裁吉田茂は保守による長期安定政権を樹立しようとして、民主党の犬養総裁に接近し、衆・参合わせて四一名を数える民主党連立派（民主党の全議席数は六九）の切り崩しに成功したのである。イデオロギー距離の小さい隣接政党を強引に包摂しようとした吉田茂の連合政権交渉は、「民主党の分裂」（四九年三月八日）という副産物を生んだが、したたかな政党政略家としての彼の一面を党内外に誇示することになった。そして、これ以後、

表2：戦後イタリアの政権

首相名	政権担当期間	PSI	PSDI	PRI	DC	PLI	Mon.	MSI	与党議席数 (占有率)	政権パターン
デ・ガスベリ	IV 47. 5~48. 5				◎	○	○		207(37.2)	P⑤
デ・ガスベリ	V 48. 5~50. 1		◎	◎	◎	◎			366(63.8)	P⑧
デ・ガスベリ	VI 50. 1~51. 7		◎	◎	◎	△			347(60.5)	P⑧
デ・ガスベリ	VII 51. 7~53. 7		○	◎	◎	○			338(58.9)	P⑧
デ・ガスベリ	VIII 53. 7~53. 8		△	○	◎	△			263(44.6)	P⑤
ペルラ	53. 8~54. 1		△	○	◎	○	○	△	263(44.6)	P⑤
ファンファーニ	I 54. 1~54. 2		△	△	◎				263(44.6)	P⑤
シエルバ	54. 2~55. 7		◎	○	◎	◎			295(50.0)	P⑩
セニ	I 55. 7~57. 5		◎	○	◎	◎			295(50.0)	P⑩
ゾーリ	57. 5~58. 7			△	◎	△	○	○	263(44.6)	P⑤
ファンファーニ	II 58. 7~59. 2		◎	○	◎				295(49.5)	P⑩
セニ	II 59. 2~60. 3				◎	△	△	△	273(45.8)	P⑤
タンブローニ	60. 3~60. 7				◎	△	△	△	273(45.8)	P⑤
ファンファーニ	III 60. 7~62. 2	△	○	○	◎				273(45.8)	P⑤
ファンファーニ	IV 62. 2~63. 6	△	◎	◎	◎				301(50.5)	P⑦
レオーネ	I 63. 6~63.12	△	△	△	◎		△		260(41.3)	P⑤
モロ	I 63.12~64. 7	◎	◎	◎	◎				386(61.3)	P⑧
モロ	II 64. 7~66. 2	◎	◎	◎	◎				386(61.3)	P⑧
モロ	III 66. 2~68. 6	◎	◎	◎	◎				386(61.3)	P⑧
レオーネ	II 68. 6~68.12	○	○	○	◎				266(42.2)	P⑤
ルモール	I 68.12~69. 8	◎	◎	◎	◎				366(58.1)	P⑧
ルモール	II 69. 8~70. 3	○	○	△	◎				266(42.2)	P⑤
ルモール	III 70. 3~70. 8	◎	◎	◎	◎				366(58.1)	P⑧
コロンボ	70. 8~72. 2	◎	◎	◎	◎				366(58.1)	P⑧
アンドレオッチ	I 72. 2~72. 6		○	○	◎	○			266(42.2)	P⑤
アンドレオッチ	II 72. 6~73. 7		○	○	◎	◎			315(50.0)	P⑩
ルモール	IV 73. 7~74. 3	◎	◎	◎	◎				371(58.9)	P⑧
ルモール	V 74. 3~74.12	◎	◎	○	◎				356(56.5)	P⑧
モロ	IV 74.12~76. 2	○	○	◎	◎	△			281(44.6)	P⑩
モロ	V 76. 2~76. 7	△	○	△	◎	△			266(42.2)	P⑤
アンドレオッチ	III 76. 7~78. 3	△	△	△	◎				262(41.6)	P⑤
アンドレオッチ	IV 78. 3~79. 8	○	○	○	◎				262(41.6)	P⑤
コシーガ	I 79. 8~80. 3	△	◎		◎	◎			291(46.2)	P⑩
コシーガ	II 80. 3~80. 9	◎		◎	◎				340(53.9)	P⑧
フォルラーニ	80.10~81. 5	◎	◎	◎	◎				360(57.1)	P⑧
スパドリニ	81. 6~	◎	◎	◎	◎	◎			369(58.6)	P⑧

(注) ◎=政権参加, ○=閣外協力, △=新政権の信任投票で棄権(新政権の樹立は認める)。
 PSI=社会党, PSDI=社民党, PRI=共和党, DC=キリスト教民主党, PLI=自由党,
 Mon.=王党派, MSI=社会運動。

(出所) Di Palma, *Surviving without Governing*. 1977.

党運営のヘゲモニーを完全に掌握し、磐石のワンマン体制を築き上げていくのである（詳しくは「戦後日本の連合政権史」の項を参照されたい）。

▽イタリアの連合政権

頻繁な政権交代

イタリア政党政治の最も顕著な特徴は、連合政権の定着と頻繁な政権交代劇である。一九四七年五月に誕生したデ・ガスペリ第四次政権から八一年六月のスパドリーニ政権までの三四年間に実に三六の内閣がイタリア政治に登場した（表2参照）。しかも、その政権構成法は極めて多彩であり、「政権パターンの見本市」とも表現できるほどである。大連合もいくつか認められる（表2参照）。デ・ガスペリの第五次、第六次、第七次内閣はその典型である。当時、キリスト教民主党は単独で三〇五議席（議席占有率五三・一％）を確保していたが、連合政権を求めた。第一次から第三次までのモロ政権、第一次と第三次、第四次、第五次のルモール政権、コロンボ政権は、純粋に他党の政権参加を必要とする状況での過大規模連合政権であった。イタリアでは戦後に誕生した内閣の約三分の一が過大規模連合政権であった。

キリスト教民主党Ⅱ万年与党

政権パターンが多様性を見ると、イタリアには政権形成のルールが欠如しているように思える。だがその一方で、驚くほどの一貫性、継続性も指摘できる。つまり、戦後誕生したすべての政権は、キリスト教民主党DCを中心に形成されているという事実である。実際のところ、戦後イタリアの政権は、(i)閣外協力をとりつけたキリスト教民主党

の単独政権か、(ii)キリスト教民主党を基軸にしたフォーマルな連合政権、のいずれかである。

表2でも明らかのように、イタリアでは政権担当の機会が特定の政党(群)に限られている。こうした事実、(i)多極性、(ii)分極化、(iii)遠心的競合、を主たる特徴とする∧分極的多党制∨につきもの現象である。⁽²⁾一定の政治的スペクトラム上に数多くの政党が存在すると、当然のことながら、イデオロギー市場は過密化する。各党は左右の隣接政党との思想的相違点を強調して選挙市場に臨み、求票活動をしなければならぬ。思想的純度を無視したトロール漁法型政党への脱皮には大きなリスクが伴う。万一失敗した場合には、核となる支持基盤すら失なう恐れがある。イデオロギー空間の拡大を伴う過密化は、一方で、社会的緊張を拡幅し、その一方で無責任政党を生む傾向がある。選挙過程がイデオロギー過剰になればなるほど、選挙での∧政党イメージ∨を政権担当に伴う∧政治責任∨に一致・整合させることがそれだけ困難になる。政党は、選挙レヴェルでは思想の無謬性と妥協の排除を強調しながら、政権レヴェルでは連合政治の必要経費として妥協工作に没頭しなければならない。左右両極のプログラム政党はこのディレンマに苦悩する。支持者からの「裏切り」論に直面しなければならないからである。逆に、中間のプラグマテイズム指向政党にとっては、このディレンマはさほど負担にならない。支持者が思想的純度よりも政権の果実を優先させるからである。そのため、隣接政党との懸隔を架橋することにも心理的プレッシャーを感じなくて済む。かくして、政権担当の実際的機会、このディレンマが小さい政党、つまり、中間政党とその隣接政党(中道右派連合政権・中道左派連合政権)に限られることになる。その一方で、左右両極の政党は長期にわたって政権から疎外されるうちに、一層反体制色を強める可能性がある。この種の政党が政権を射程距離に収めるためには、思想と行動の両面で歴史的大転換を遂げ、党の全エネルギーをその正当化に投入しなければならぬであろう。中道右派から中道左派まで

での広がりの中で展開されてきた戦後イタリアの連合政治が左右交代型連合政治に置き換えられるかどうかは、ユーロ・コミュニズムの旗手ベルリングェルの政治的力量と政権参加経験を持つ社会党の対応によって決まるであろう。

混乱の中の継続性

高頻度の政権交代劇は、一般には、政局混迷につながる不安定の徴候と考えられている。頻繁な政権交代は政策の一貫性を損い、政治的空白は責任政治に害を与えると考えられている。だが、そうした表面的な印象とは対照的に、イタリアの政変病には際立った継続性とエレガンズがうかがえる。何度シャッフルしても出てくるカードは同じである。キリスト教民主党が出てこないことは戦後一度もなかった。その意味では、戦後の西ドイツや日本よりも継続性は強い。むしろ、一九三二年から七六年までのスウェーデンに似ていると言えよう。出てくるカードが同じなのは政党だけではない、政治家もそうである。何度シャッフルしても大臣常連組が顔を出してくる。例えば、モロは首相を五回、閣僚を一四回経験している。アンドレオッチは首相四回、閣僚実に一九回。首相の記録ではデ・ガスペリ八回、ルモール五回など。閣僚記録ではコロンボ二二回など。西側諸国では珍らしい現象である。短命大臣を大量生産する日本とある意味で非常に似ている。

また、シャッフルのスタイルは非常にエレガントである。イタリアの政権は、内閣不信任決議をつきつけられて崩壊するのではない。連合パートナーが醸し出す「同席拒否」気配を察して、また、議会内に漂う「政権解消」待望気運を察知して、事前に、自ら辞職するのである。内閣不信任案を乱発して、議場を怒号と対決の巷と化すことはない。また、政権の座に恋慕する権力渴望者が強引な「引きずり降り」と醜悪な「しがみつき」劇を演じることもない。こうしたエレガンズは頻繁な政権交代を伴う連合政治システムが過去の経験から体得した生活の知恵であるか

もしれない。フォーマルであれインフォーマルであれ、すべての政党は潜在的な次期連合パートナーであるので、政党間関係の復元力を完全に封殺してしまおうような行動を慎重に回避しなければならない。閣外協力を前提とした単独少数党政権とフォーマルな過大規模連合政権の多発性がこれを証明しているように思われる。要するに、「高頻度の政権交代の中での奇妙な継続性」がイタリア連合政治の個性である。

スバドリーニ連合政権＝伝統からの逸脱

一九八一年六月二八日に誕生したスバドリーニ政権は、キリスト教民主党による「首相の座独占」に終止符を打つたという意味では、伝統を小規模修正した画期的な政権である。一九四六年にイタリア共和国が発足して以来、首相の座を独占してきたキリスト教民主党は、秘密結社P2スキヤンダル事件でフォルラーニ政権が崩壊した後も、約二週間にわたって第二次政権の組閣作業を展開したが、連合パートナーであった社会、共和両党がフォルラーニ首班論を拒否したため、政権独占記録の更新を断念した。

「小さな党（共和党）の大きな書記長」と称されるジョヴァンニ・スバドリーニ（五六才）は、大学教授、ジャーナリストを経て政界に投じ、政界進出後僅か九年で首相の座を手にした。しかも、得票率三％、下院議席数一六という超小型政党（下院第七党）を率いてである。首相はキリスト教民主党（二六二議席）、社会党（六一議席）、社会民主党（二〇議席）、共和党（一六議席）、自由党（九議席）の五党からなる中道左派・過大規模連合政権を形成した（合計議席数三六九、議席占有率五八・六％）。閣僚ポスト（計二七）の配分にあたっては、キリスト教民主党に大蔵、外務、内務の重要ポストを含む一五ポストを与え、伝統からの大幅逸脱を慎重に回避した（社会党七、社会民主党三、共和党一、自由党一）⁽⁴⁾。秘密結社P2メンバーの大半が自党の党員であったこと、および、政権独占阻止を求める世論

が急速に高まっていることを配慮した結果、「犠牲の精神」⁽⁵⁾でスバドリーニ首相への協力を表明したキリスト教民主党が、この政権の運命を握っていることを誰よりも首相自身が知っているからであろう。

ユーロ・コミュニズム＝伝統への挑戦

デイ・パルマ Giuseppe Di Palma は△極端な多党制▽を母胎にしたイタリア連合政治を次のように性格描写している⁽⁶⁾。

(i) イデオログの連合——政党数が多いため、イデオロギー市場が過密化する。各党は生き残るために党の存亡をかけて自己主張合戦を展開する（思想的純度の維持・向上）。連合形成レヴェルにも当然それが持ち込まれる。

(ii) ネガティブな連合——連合形成は△親体制度▽を判別基準にして減算方式で進められる。反体制政党の進出に対抗する必要性、つまりシステム維持という目的で共働できる政党が連合を形成する。極言すれば、思想的一致や共同綱領よりも△反・反体制政党▽の姿勢が、連合形成の条件として優先される。かくして、政権担当の実算的可能性は中道諸党に限定されてしまう。

(iii) 包囲された連合——巨大で活発な野党勢力に包囲されている。すべての連合政権にとって主要な敵は共産党である。包囲されていると感じた時には、不決断と閣内不統一が連合政権にのしかかる。中道諸党は共産主義の亡霊を巧妙に活用して選挙戦に臨む。連合パートナーは自らをリベラルと称して、選挙を体制選択の場に転換する。

(iv) 無責任な連合——中道政権以外に有効な選択肢がないため、万年与党の地位を保証された中道諸党が活性を失ない、無責任政党化し易い。特に、連合ゲームをエンジョイする傾向にある弱少政党が無責任な行動をとることが多い。また、左右間の真の政権交代が欠如しているため、有権者も無関心になり易い。

擬似政権交代を高頻度で繰り返すイタリア連合政治を変動の波に乗せる真の力はスパドリーニではなく、ベルリングエル書記長と彼が率いる共産党の行動に求められよう。アンドレオッチ政権にインフォーマルな支持を与え、そのベイ・オフとして党史上初めて下院議長のポストを手にした時、共産党は「包囲する政党」から「政権への距離」を強調する政党への積極的離脱を選択した。今日では既に、争われざる最大の野党として、政権の運命を左右するだけの力量（威嚇力）を持っている。

スパドリーニ政権の出現に際して、共産党は「野党の立場を貫く」としながらも、政局の変化を「左翼政権への第一段階」と好意的に評価し、是々非々の立場で臨むと表明した。だが、左右交代型連合政治への移行を実現するには、今なお、時間がかかるであろう。△反・反体制政党▽間のネガティブな連合というイタリア連合政治の伝統にクサビを打ち込めるかどうかは、第二次コシーガ内閣で六年ぶりに政権参加して以来、厚遇されている社会党（第二次コシーガ内閣で九ポスト、フォルラーニ内閣で七ポスト、スパドリーニ内閣で七ポスト）との連合ゲームが、最終的には、重要となろう。

P⑨△救国・拳国一致大連合政権▽

これは、国家が戦争や経済的大不況などの非常事態に直面した時、相競合している政党が一時的に政治休戦し、諸党派が一致・連合して政権を担当するパターンである。この種の政権は二党制の下でも、多党制の下でも発生する。前者の例としてイギリスを考えてみる。一九一六年一月六日から一九一九年一月三日まで続いたロイドジョージ内閣は第一次世界大戦を乗り切るための戦時・拳国一致連合政権であった。四〇年五月一日に成立し、四五年五月二三日まで政権を担当したチャーチル内閣は大戦下の難局を克服するための戦時・拳国一致連合政権であった。また、

戦争以外の国難を乗り切るために樹立された救国・挙国一致連合政權の例としては、三一年八月二四日から三五年六月七日まで続いたマクドナルド内閣がある。この内閣の課題は世界恐慌から母国イギリスを救い出すことであつた。⁽⁸⁾

多党制下の例としては、スウェーデンのハンソン内閣などがある。この内閣は、三九年一月一三日に樹立され、四五年七月三十一日まで政權を担当した戦時・挙国一致連合政權であつた。もちろん、その課題は第二次世界大戦の乗り切りであつた。

わが国においては、三二年五月二六日に成立した齋藤実内閣以後のいわゆる非常時内閣がこれにあたる。齋藤実は政党・軍部の協調を重視して救国・挙国一致連合政權というパターンを採用したが、軍部の發言力を強化する結果になつた。

このパターンは、国家の非常事態を前提にしてはじめて正当化される政權であるため、政權樹立の要因となつた国難が何らかの形で解決され次第、解散されるべき性格の政權であるといえよう。国難の継続を主張してこの種の政權がいたずらに長期化されたり、居坐り工作を策すれば、「複数の部分間の競合」を前提とする政党政治の精神は死滅するであろう。戦時・挙国一致連合政權の解消と総選挙の時期をめぐって、チャーチル、シンクレア、アトリイ、ベヴァン、モリソンらの間で展開された政治的駆引きは興味深い(D・パトラー編『イギリス連合政治への潮流』東大出版会を参照されたい)。

F 過小規模連合政權——P⁽¹⁰⁾

この政權は、二つ以上の政党が連合しても、なおかつ信頼できる議会内過半数議席を確保できない連合政權であ

り、連合少数派政権とも表現できよう。つまり、議院内で過半数支持勢力を確保する上で「必要な党」を閣内に含んでいない政権である（連合形成地位が、 \wedge MWC \vee である政権⁹）。最小勝利資格（MWC）を持つ連合を形成するためには閣内に取り込む必要のある政党の数が多ければ多いほど、また、その「必要な党」の規模が大きければ大きいほど、最小勝利地位からの逸脱はそれだけ大きくなる¹⁰。

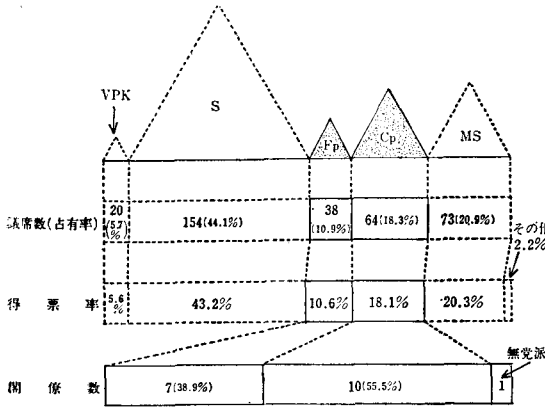
このパターンは単独・少数党政権（P⑤、P⑥）に劣らず、今日の議会政治の一般的ルールから逸脱している。この政権の決定的特質は政権の運命をほぼ完全に他に委ねていることである。内閣が負うべき責任を進んで引き継ぐ意思を持った、より大きな連合が登場すれば、政権はその時点で自動的に崩壊する¹¹。

また、内閣不信任案が提出されたら、よほどのことがない限り、成立する可能性が非常に大きいので、内閣は常に辞表を胸のポケットに入れて政局運用に当らなければならない。政党が連合ゲームの中で、このタイプの政権を可能な限り回避しようとするのは、その構造的脆弱性を熟知しているからである。

(i) 閣僚ポストの配分に関する連合パートナー間の不満は少ない。どの連合与党も得票率を上回るポストに恵まれるからである。だが、権力指向の強いプラグマティズム政党が野党になっている時には、その党が「政権からの排除」を理由に、内閣をことある毎に威嚇するかもしれない。

(ii) 連合パートナー間のイデオロギー距離は（一般に）小さくなるので、政権の思想的凝集力は大きいであろう。だが、それは、（必然的に）野党との政策距離を大きくする。イデオロギー純度を保持しようとするれば、重要法案の提出を差し控えなければならないし、瑣末な政策領域であっても、成立を期すのであれば、政策案件ごとに野党を一本ツリする努力を怠れない。野党は大きな威嚇力を背景に政府からの一方的譲歩を要求するであろう。

図3：第3次フェルディン政権(1981.5～)



(注) VPK=左共産党, S=社民党, Fp=国民党, Cp=中央党, MS=穏健統一党

(四)野党に大きな威嚇力を与えるために、議会運営、政権運営は常に行き詰まりの危機に直面する。政権レヴェルでは、連合パートナー間のイデオロギー距離が小さいため、合意の形成は簡単であろう。だが、議会レヴェルでは八政党間政治が過度に過熱するため、合意形成が非常に困難になる。法案を成立させるためには、政府が譲歩しなければならぬ。相次ぐ譲歩は「原理の腐食」を引き起し、連合パートナーの欲求不満を拡大する。卓抜の政党戦略家でもない限り、この欲求不満は確実に爆発するであろう。

構造的脆弱性を持つこの種の政権は、現実の政治の世界にはほとんどない。少数党政権の伝統があるスウェーデンもこのタイプの連合政権は戦後一度しか経験していない。一九八一年五月八日に成立した第三次フェルディン政権がそれである。七九年選挙で一議席差という僅差で社会主義ブロック(社会民主労働党十左共産党)を破ったブルジョワ・ブロック(中央党十国民党十穏健統一党)は七六年に続いてフェルディン(第二次)首班のブルジョワ三党連合政権を形成した(閣僚配分、穏健統一党八、中央党七、国民党五)⁽¹²⁾。だが、この最小勝利連合政権は、累進課税率引下げを骨子とする税制改革問題で閣内不統一を露呈し、二年後に崩壊してしまった。中道二党(中央党、国民党)が閣内の連合パートナーとの政策距離ではなく、閣外にいる社民党との政策距離を短縮しようとしたからであ

表4：政権のパターン

単 独 政 権	A 単独・独 占型政権	P① 一党制下の単独・独占型政権 { (i) 全体主義一党制下の単独・独占 型政権 (ii) 権威主義一党制下の単独・独占 型政権 (iii) プラグマティック一党制下の単 独・独占型政権
		P② ヘゲモニー政党制下の単独・独占型政権 { (i) イデオロギー指向ヘゲモニー政 党制下の単独・独占型政権 (ii) プラグマティズム指向ヘゲモニー 一政党制下の単独・独占型政権
	B 単独・過 半数政権	P③ 政権交代型・単独過半数政権(二党制下) P④ 一党支配型・単独過半数政権 (一党優位政党制下)
	C 単独・少 数党政権	P⑤ 相対多数政党(第一党)による単独少数 党政権 P⑥ 第二党以下の政党による単独少数党政権 (純・少数党政権)
連 合 政 権	D 最小勝利 連合政権	P⑦ 最小勝利連合政権
	E 過大規模 連合政権	P⑧ 平時・大連合政権 P⑨ 救国・挙国一致連合政権
	F 過小規模 連合政権 (連合少数 派政権)	P⑩ 過小規模連合政権

る。フェルディン首相は穩健統一党を放逐して三党連合を解消した後、空白になった閣僚ポストを中央党、国民党で埋め、過小規模連合政権の樹立に踏み切った⁽¹³⁾。それに先立って、フェルディン首相は、インフォーマルな政策後見人(社民党)の支持を党首間電話会談でとりつけた。この政権は、第一党・第二党を野党に回した、三・四位連合政権で、合計議席数一〇二、議席占有率二九・二%の典型的な(第一党が閣内にいないという意味では変則的な)過小規模連合政権である(閣僚配分、中央党一〇、国民党七、無党派一)。

「政権パターンの見本市」であるイタリアには、予想通り、いくつかの実

例がある。シェルバ政権（五四年）、第一次セニ政権（五五年）、第二次アンドレオッチ政権（七二年）、第二次ファンファーニ政権（五八年）、第四次モロ政権（七四年）、第一次コシーガ政権（七九年）の六つである。前三者は、与党の議席占有率がちょうど五〇％で、最小勝利連合政権の印象を与えるが、議会政治における勝利の最低条件は「五〇％プラス一議席」であるので、本質的には過小規模連合政権に類別すべきであろう。

このタイプの政権が出現するためには、(i) 政策後見人として政権を背後から支えるインフォーマルな閣外協力者が存在することが前提となる。また、(ii) 政権形成過程が一種の拒否権ゲームの場となってしまうと政治的空白が続き、最終的に、「憲政の常道」に従って、第一党（相対多数政党）プラス小党に当面の政局運営を委ねようという気運が強くなった時、(iii) 各党が前政権党の既得権を認めて、次期選挙までの打倒しやすい暫定政権として過小規模連合政権をも拒否しない時、出現する。

いずれにせよ、つなぎ役の選挙管理内閣という性格が強く、大きな政策実現能力は期待できない。△数の論理▽が支配する国や、少数党政権の伝統が定着していない国では、あまり想像できないパターンであるといえよう。

——未完——

注

- (1) L・ドッド 岡沢憲美訳『連合政権考証』政治広報センター 一九七七年 五八頁。
- (2) 分極的多党制（極端な多党制）の特質については、G・サルトリ 岡沢・川野訳『現代政党学Ⅰ』早稲田大学出版部 一九八〇年 二二七～二九〇頁。
- (3) 『朝日新聞』一九八一年六月二〇日号

- (4) 『朝日新聞』一九八一年六月二九日号。
- (5) 『読売新聞』一九八一年六月一六日号。
- (6) Giuseppe Di Palma, *Surviving Without Governing*, University of California Press, 1977, pp. 246.
- (7) 『朝日新聞』一九八一年六月一九日号、六月二九日号。
- (8) 関係名簿については David Butler and Anne Soman, *British Political Facts, 1900~1979*, London: The Macmillan, 1980.
- (9) L・ドッド 岡沢訳 前掲書 五九頁。
- (10) L・ドッド 岡沢訳 前掲書 五九頁。
- (11) L・ドッド 岡沢訳 前掲書 五五頁。
- (12) 岡沢憲美「フェルディン政権とその楽観主義」『スウェーデン社会研究月報』Vol. 11, No. 12 スウェーデン社会研究所一九七九年。
- (13) 岡沢憲美「内閣危機」とフェルディン首相の選択」『スウェーデン社会研究月報』Vol. 13, No. 7・8. スウェーデン社会研究所 一九八一年。